収入馬瀬良雄監修、佐藤亮一、小林隆、大西拓一郎合編（2002）
《方言地理學の課題》pp.127-137, 東京·明治書院

台湾における漢語方言地理学

台湾・元智大学
洪 惟 仁(Ang Uijin) ・撰文
谷口一康・訳

０．前書き

台湾における漢語は共通語の中国語以外に、主として閩南語と客家語の２つがあるが、漢語使用人口全体のうち閩南語が約 85%、客家語が約 15%を占め、閩南語の使用人口が圧倒的に多いことがわかる。したがって台湾における漢語調査研究はどちらかというと閩南語に集中し、客家語の研究は相対的にかなり少ないのもうなずける。とくに方言地理学的研究は全くないに近いといえる。

本論では今までの台湾における漢語の方言地理学的研究の業績を紹介する。

1. 戦前のデータ収集の時代

日本統治下の台湾における閩南語や客家語のデータ収集には、総督府などの公的機関による辞書や教科書の編纂のほか、長老教会による辞書や教科書の編纂、教会公報の発行など民間によるものがあった。だが、これらはいずれも実用性重視に偏り、必ずしも学術的なものとは言えなかった。そんな中での例外が、小川尚義である。

台湾総督府監修の『日台大辞典』(1907) の中で主編者の小川尚義(1869－1947 年) は、漢語歴史比較言語学の論文を発表し、この中で東アジア各地の漢字音の比較および中古音の推定を行い、さらに付録として多色刷りの「台湾言語分布図」（図 1 参照）をつけて前書きにかえて

いる。もちろん、この地図は方言調査資料に基づいて作成したものではなく、国勢調査時の祖籍（先祖の出身地）の調査資料を基にしたものであると思われる。ただ、祖籍と台湾の漢語方言の分布とはおおよそ一致するので、1992 年までの台湾言語地図のうち、最も信頼のおけるものとなっている。実際の調査に基づいて作成された言語地図には、台北帝国大学言語研究室（言語学担当：小川尚義・浅井恵倫）著『原語による台湾高砂族伝説集』(1935) の中に付された「台湾高砂族言語分布図」がある。

2. 戦後の非方言地理学的方言調査

台湾の漢語方言調査は中国漢語方言調査の延長線上にあるものの、方法論的には台湾の方言調査方法には大きな改善と進歩がある。

中国の漢語調査はスウェーデンの言語学者カールグレン（高本漢）に始まるが、彼は自ら 24 か所の北方方言の漢字音を調査し精密音声表記による記録を行った。

また、中央研究院歴史言語研究所では趙元任氏の指導の下、1928 年から 1941 年にかけて 8 回にわたって漢語方言調査が行われた。調査地域は、広東、広西、陝西、安徽、江西、湖南、湖北、雲南、四川などの省にまたがる。湖北 (1948)、雲南 (1969)、湖南(1974) などの調査報告書の巻末には、中古音類の特徴に基づいた分布図 50～60 枚が付録としてつけてある。

戦後の中国では引き続き多くの方言調査研究が行われた。なかんずく、中国社会科学院とオーストラリア人文科学院との共同編集である『中国語言地図集』(1987) は中国言語地理学の成果の集大成である。

しかし、中国の方言調査は、調査票（単語・漢字リスト）の作成からデータの分析、方言地図の作成におよぶまで、中古音類を参考指標として行われてきた。さらにこれは漢語方言区の確定や漢語方言の分布を明らかにするといった目的に限定されたやり方である。言語の実態そのものの調査や小方言区の細密な調査はおろそかにされてきた。グロータースはこの点を厳しく指摘している (Grootaers 1994:24)。

さて、台湾における漢語方言調査研究は中国大陸の政治的変化にとも

なう政府と中央研究院の台湾への移転に始まるが、中央研究院の歴史言語研究所は漢語を扱う当時唯一の研究機構であった。ただし、同研究所で漢語方言(閩南語や客家語)を研究していたのは董同龢、楊時逢、周法高の３人のみであった。このうち代表格は董同龢である。

彼らの調査は、被調査者に歌謡を歌ってもらったり、物語を話してもらったりして音声を記録し、そのデータに基づいて音韻体系をまとめるという手法を採ったもので、漢語方言用の調査票のみに頼りきったやり方から、聞こえてきたものを片っぱしから記録するという方法に移り変わり、大陸時代の方言調査の手法とはかなり異なっている。

ただ、このような方法で収集できる言語データは限られたものになり、構築すべき音韻体系に漏れが出る可能性がある。また、個々のデータの間で収集内容に大きな差が生じ、方言地図の作成が難しくなる。言語地理学の観点から言えば、それほど効果が期待できるというわけではない。

董同龢氏は若くして 1963 年に亡くなり、その後は漢語方言調査の事業を丁邦新が継ぐことになる。また、丁邦新の生徒の中では楊秀芳が台湾方言の調査研究に最も力を尽くしている。80 年代以降は、この流れを汲む学者が多くの方言調査報告を著したが、いずれも定点調査にとどまり、方言地理学を行ったのは Kubler ひとりだけであった。

3. 方言地理学的研究

戦後の台湾では方言地理学的研究を進める学者は数えるほどしかいない。以下、それぞれについて簡単に紹介することにする。なお、いずれも台湾言語学界の主流派ではない。

3.1. 鍾露昇の方言地理学研究

台湾の閩南語の方言調査を行った学者の中に、アメリカ留学を経た方言地理学研究者で台湾師範大学助教授の鍾露昇がいる。筆者の恩師でもある鍾露昇教授は 1967 年『閩南語在台湾的分布（台湾における閩南語の分布）』を発表、調査項目は少ないが調査点は各市町村にわたり、ひとつひとつの語についての方言地図を作った。これは台湾漢語方言地理学上の草分け的な著作となった。

鍾露昇の調査方法では、西洋的な方言地理学的手法を取り入れつつ、カールグレンと趙元任の始めた比較言語学的な調査方法のよいところを吸収し、伝統的な文献の比較も非常に重視した。

鍾露昇の方言地理学のための調査票は非常に緻密に考えられたもので、調査語彙項目は 27 しかないものの、ひとつひとつの項目は方言の類型的意義を代表できるものである。また、語彙選択の基準は中古音類ではなく、純粋に閩南語内部の方言差を考慮したものである。この点で、この調査研究手法は中国大陸時代の漢語方言調査方法を非常に上手く発展させたものであると言えよう。

また、調査地点選定も県より小さい幅で細かく考慮されている。鍾露昇は台湾の閩南語の分布は漳州方言と泉州方言が入り混じった複雑な様相を呈しているため、「県や市を単位とするのでは明らかに不足であり、区・郷・鎮を単位としてさらに細かく調査すべきである」として、台湾全域より調査地点 174 か所を選び出した。

被調査者の年齢層も限定し、鍾が教鞭をふるっていた台北師範大学（現・国立台湾師範大学)、台湾・輔仁大学の閩南語をしゃべる学生のみを調査対象とした。鍾は「被調査者は主に 1 年生だが、彼らは家を離れてまだ久しくないので自分の出身地の発音を比較的よく保っている。発音は年齢や教育程度の違いにより使用状況が異なるが、これらの学生の年齢は 18 歳から 31 歳までで、そのうち人数が最も多いのは 19 歳から 26 歳までである。」(P.10) と説明している。

当時は社会言語学がまだ現在のように発展しておらず、年齢や教育程度といった社会階層的な要素は中国の伝統的な方言学の学者たちが見過ごしていた部分であった。だが、鍾は調査の中できちんと区別を行っており、この意味でもまた彼の研究は秀でていると言えよう。

鍾露昇の調査点は合計 174、調査人数は 448 人。うち男性 305 人、女性 143 人。調査点 1 か所あたりの人数は 2.57 人であった。調査人数が調査点 1 か所につき 1 人を超え、かつ、調査結果がそろわない場合の調査結果の取捨選択について鍾は統計学的手法を採った。鍾は全ての回答をそのままデータとして残しながらも、区・郷・鎮という小さな単位を基に、統計的に多数を占める形式を代表的な形式として地図に取り入

れ、合計 27 枚の方言分布図を作成した。これにより鍾は現代の台湾閩南語方言の分布についての貴重な記録を残すこととなった。

鍾露昇のこの論文は漢語方言学において最も精密な調査であり、漢語方言地理学上、空前の成果であると言える。小さな欠点はあるものの彼の研究成果には大きなものがあり、今後も言語地理学者の間で語り継がれるところとなるであろう。

3.2. Kubler の澎湖方言調査

丁邦新の学生のうち、アメリカ人の弟子であり、また方言地理学を行ったたったひとりの生徒である Cornelius Kubler（顧百里）は、台湾大学中国文学研究所での修士論文『澎湖群島方言調査』(1978) を著した。

Kubler のやり方は鍾露昇の調査の方法によく似ているが、澎湖諸島にのみしぼった研究しか行っておらず、規模はかなり小さなものである。しかしながら、Kubler は自ら澎湖諸島に出向いて調査している。澎湖の人口は当時 11 万余りだったが、64 の小さな島々から構成されており、有人の島は 21 もある。人の住んでいる島々に全部出向いて回るのは容易なことではない。

Kubler は澎湖の 6 つの郷や鎮の 88 の村を全て訪問して回り、50 の「最も変化の多い語」について「総合報告」としてまとめ、ひとつひとつの方言のデータを詳細に記録した。

Kubler が調査に用いた 50 語は、その中の多くは実は「最も変化の多い語」とは言えない。事前に閩南語そのものや澎湖諸島内部の方言差についてきちんとした検討を行っていなかったがゆえに、結局、限られた語数についてしか効果的ではなく、方言分布図についても 12 枚しか作成できなかった。

また、Kubler の調査は被調査者の選択においても少し問題がある。それは被調査者の年齢が 11 歳から 70 歳までと様々な年齢層にまたがっているということである。仮に澎湖方言の各年齢層間での差異が大きいとすれば、Kubler のような年齢層を分けないやり方はやはり好ましくないのではないだろうか。

この論文はこのようないささかの問題を抱えてはいるものの、修士論文としてはそれなりに非常に貴重なものである。特に作者自ら離島に赴き、村や里という小さな行政単位にまでわたってフィールドワークを行うという細密さは、今日にいたっても台湾の方言地理学的な方言調査にはなかなか見られないものである。

3.3. 洪惟仁の初期の方言調査

洪惟仁は 1985 年 2 月より個人的に台湾各地の閩南語、および、閩南語地域内の福建客家語（いわゆる「鶴佬客」の客家語）について調査を行った。当初、洪の調査票の語彙項目は 100 余りであったが、これは台湾閩南語の分布についての概略的な調査を行うことを目的としたものであった。

また、洪惟仁は様々な刊行物の中で調査の経過やおよその成果について発表したが、後にこれを『台湾方言之旅』(1992) にまとめて出版した。これは台湾閩南語および客家語の類型地理学研究の簡潔なレポートとなった。

巻末には調査資料に基づいて作成された台北や台湾の漢語方言地図が付されている。この２枚の地図は簡単なものではあるが、実際の調査データに基づいて作成された初めての台湾漢語方言区分地図である。（図 2 参照）

3.4. Brewer の台湾方言調査

淡江大学英文系の教授、Warren A. Brewer（卜温仁）は 1993 年から 1999 年にわたり、政府・国家科学委員会の援助の下、調査計画「台湾語言学図集」(Linguistic Atlas of Taiwan) を進めた。調査対象は閩南語・客家語を含み、閩南語を主体にしたもので、調査過程では計画外で被調査者より 350 の昔話を採集しており、貴重な言語データとなっている。

Brewer の調査票は 6 回もの修正を経ており、調査に用いた語彙は計 13 類、325 語である。いずれも常用語彙で、調査票からは語彙の調査であることが伺えるが、精密音声表記による印象記述 (impressive transcription) を採用しており、聞こえたものから手当たり次第書いてい

くいう手法である。

調査結果は現在も整理中で、すでにできあがった研究報告は、440 の方言ポイント、824 の被調査者の記録に基づく、「ガチョウ（鵞鳥）」と「親指」の 2 つの項目のバリエーション分布図で、いずれも地図情報処理ソフト ArcView GIS を使用して作成した地図である。ただし、印象記述を採用し直接地図上に示しているため、バリエーションの複雑さゆえに地図上に等語線を引くことが難しい。

Brewer は台湾方言調査史上調査人数が最も多く、また初めて GIS を地図作成に応用した学者である。

3.5. 中央研究院歴史言語研究所の方言調査

中央研究院の歴史言語研究所（すなわち現在の言語研究所準備処の前身）は 1988 年 3 月から 1996 年 7 月まで前後して 9 年間、国家科学委員会の資金援助の下、断続的にではあるが 6 年余りの「台湾地区漢語方言調査研究計画」を進めた。この計画は龔煌城氏が代表者を務めていた、実質的には洪惟仁が中心となって調査の大部分を担当し、ほかにも、張屏生が屏東・澎湖の両県、姚栄松が三峡、林英津が八堵、許恵娟が秀水の方言調査に当たった。また、コンピューター・プログラミングには駱嘉鵬が当たった。

調査票は事前に精密にデザインされたものである。筆者・洪惟仁は閩南語方言の文献について詳細な比較研究を行い、閩南語方言の実態について全面的かつ徹底した理解を得、その上で 1985 年 2 月より行っていた先行調査に基づきながら調査票の考案を進めた。

我々は検討の結果、調査票作成にあたって次の 3 つの調査目的を念頭におくことにした。

(1) 調査した方言ポイントの完全な音韻体系を明らかにする。

(2) 調査した方言の音韻上、語彙上、文法上の特徴を明らかにし、方言地理学・方言類型学・社会方言学の基礎資料とする。

(3) 方言地図を作成する。

この調査票に収録した 1000 語以上の調査語彙は音声・音韻・常用語彙・文法の 4 つの部分に分かれる。

6 年 3 か月にわたる調査を経て、我々はついに台湾全域の閩南語方言の調査を終えた。1997 年 7 月までで、我々の調査人数は、詳細調査が約 100 名、600 語程度の簡易調査が 175 名ぐらいで、合計 275 名におよび、すでに表記や入力をすませたデータは 13 万件にのぼる。このほかにもまだ表記していない録音テープが多く残っており、将来的には 30 万件のデータがまとまることになるであろう。これらのデータは数量的には 1000 枚以上の詳細な台湾方言地図を作成するのに十分なほどであると思われる。

4 結論

台湾の漢語調査研究は、日本統治時代の総督府のデータ収集に始まるが、台湾の言語分布地図を初めて作成したのは小川尚義である。

戦後の台湾の漢語方言調査は一部中国漢語方言調査の延長線上でもあるのだが、董同龢をはじめとする漢語方言学者は歴史比較言語学の枠組みに限定はしないものの、いずれも単点方言調査によるものであった。

台湾の方言地理学の創始者は鍾露昇であるが、氏の調査方法では、西洋的な方言地理学的手法を取り入れつつ、カールグレンと趙元任の始めた比較言語学的な調査方法のよいところを吸収し、伝統的な文献の比較も非常に重視した。方言地理学のための調査票は非常に緻密に考えられたもので、調査語彙項目は 27 しかないものの、ひとつひとつの項目は方言の類型的意義を代表できるものである。また、調査地点選定も県より小さい区・郷・鎮を単位として台湾全域より 174 か所を調査し、1967 年『閩南語在台湾的分布（台湾における閩南語の分布）』を発表した。

後に、鍾露昇の方法は洪惟仁によって引き継がれることとなった。ほかにアメリカ人の Kubler、Brewer も閩南語方言地理学的研究もしたが、Brewer と洪惟仁は現在、図形処理ソフトの ArcView GIS を利用し、調査の成果を方言地図にまとめているところである。

台湾での方言地理学的研究は Kubler の修士論文と洪惟仁の初期の方言調査を除き、いずれも中央研究院歴史言語研究所と国家科学委員会の資金援助の下に行われた事業であった。

参考文献

Brewer, Warren A.
2000 *Taiwanese Southern Min 'Thumb'*, unpublished.
2000 「台灣語言學圖集 99 年計劃」國家科學委員會專題研究計劃成果報告

グロータース(W. A. Grootaers)著, 岩田禮、橋爪正子編譯
1994 『中國の方言地理學のために』, 東京・好文出版社

小川尚義
1907「台灣言語分布圖」, 載『日台大辭典』, 台灣總督府

中國社會科學院和澳大利亞人文科學院合編
1987 『中國語言地圖集』, 香港・朗文(Longman 遠東)出版公司

台北帝國大學言語學研究室
1935『原語による 台湾高砂族伝説集』, 刀江書院

周法高
1964『桃園縣志卷二人民志語言篇』, 桃園縣政府

洪惟仁
1989-1996『台灣閩南語方言調查研究報告』, 國家科學委員會研究報告
1992『台灣方言之旅』, 台北・前衛出版社

高本漢著[1915-1926] 趙元任、羅常培、李方桂合譯
1940『中國音韻學研究』, 商務印書館出版

楊時逢
1957『臺灣桃園客家方言』, 台北・史語所單刊甲 22。
1971「臺灣美濃客家方言」, 台北・史語所集刊 42.3:405-465

董同龢
1959 「四個閩南方言」, 台北・史語所集刊 30 本

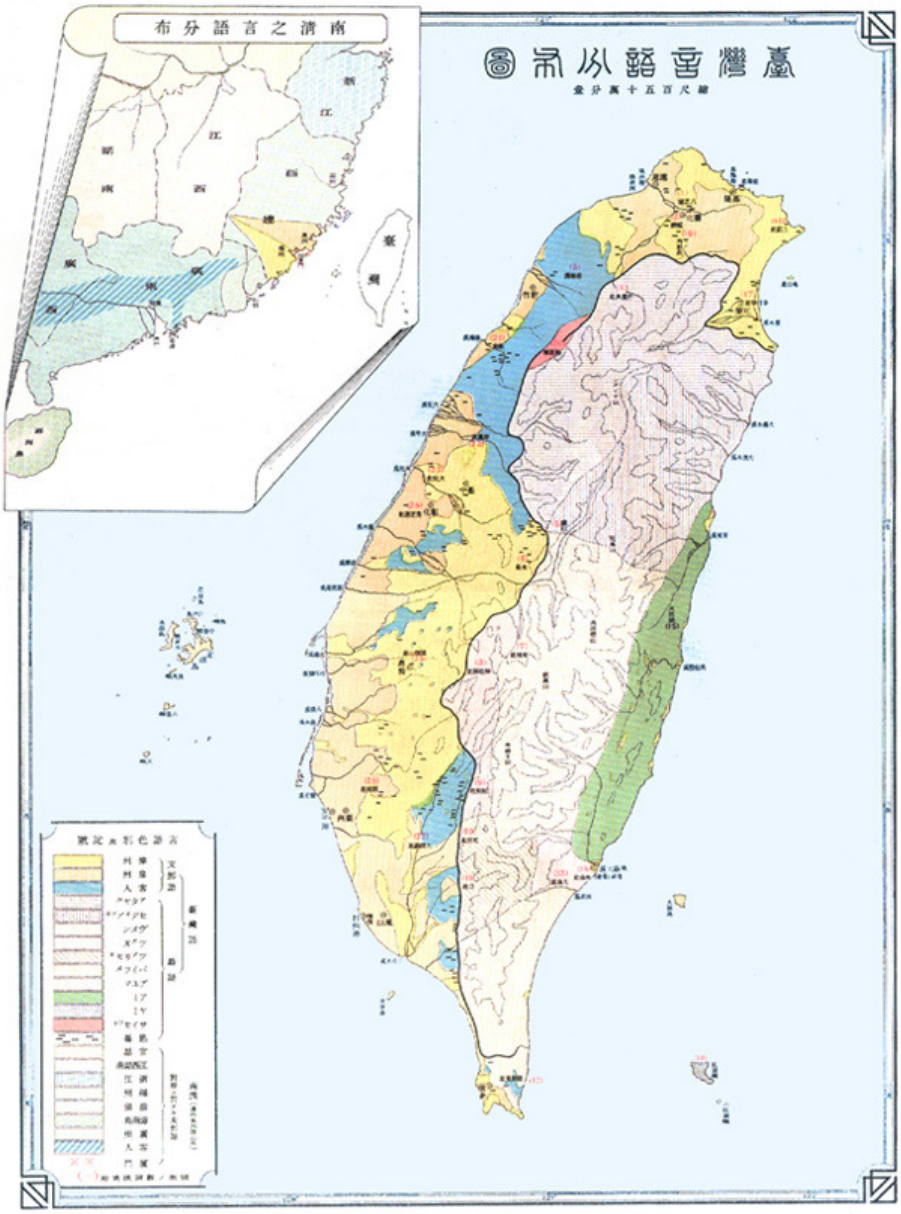
董同龢、趙榮琅、藍亞秀
1967『記台灣的一種閩南話』, 台北・史語所單刊甲種 30 本

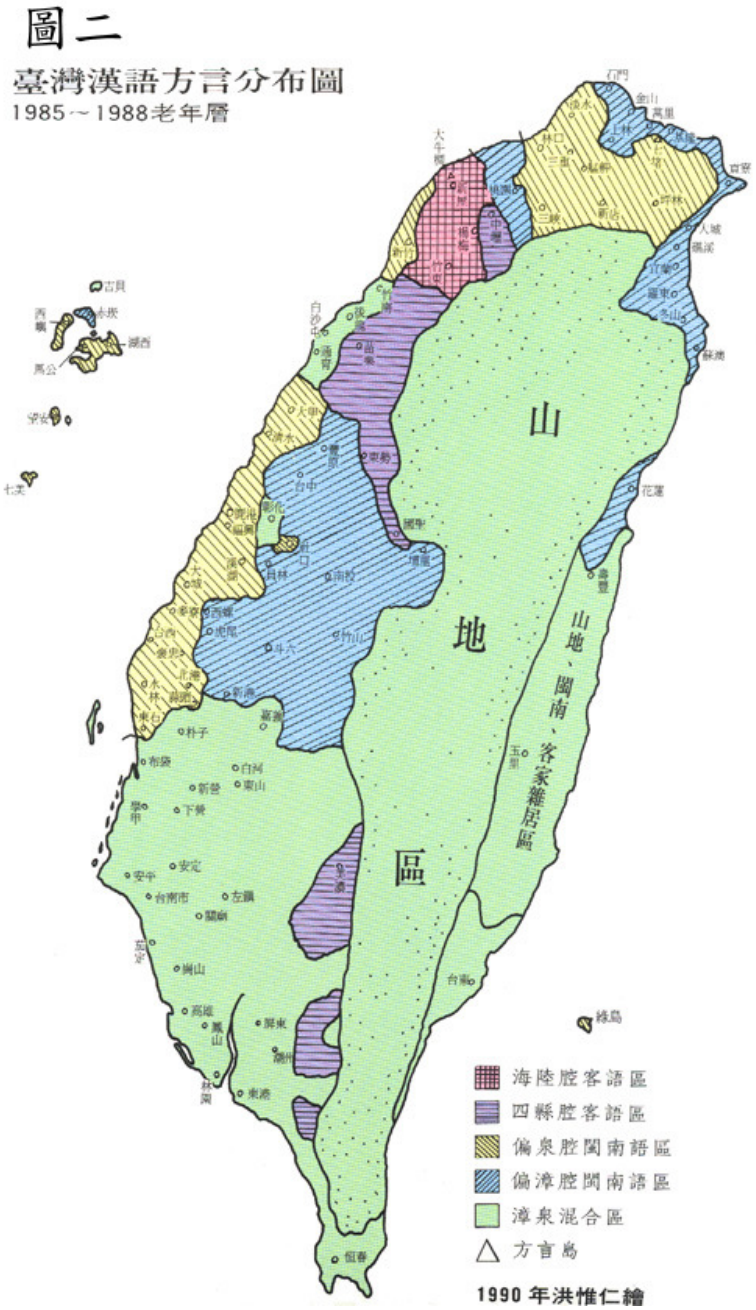
趙元任
1928『現代呉語的研究』, 清華學校研究院叢書 4

鍾露昇
1965『福建惠安方言』, 手稿
1967『閩南語在台灣的分佈』, 台北・国家科学委員会研究報告

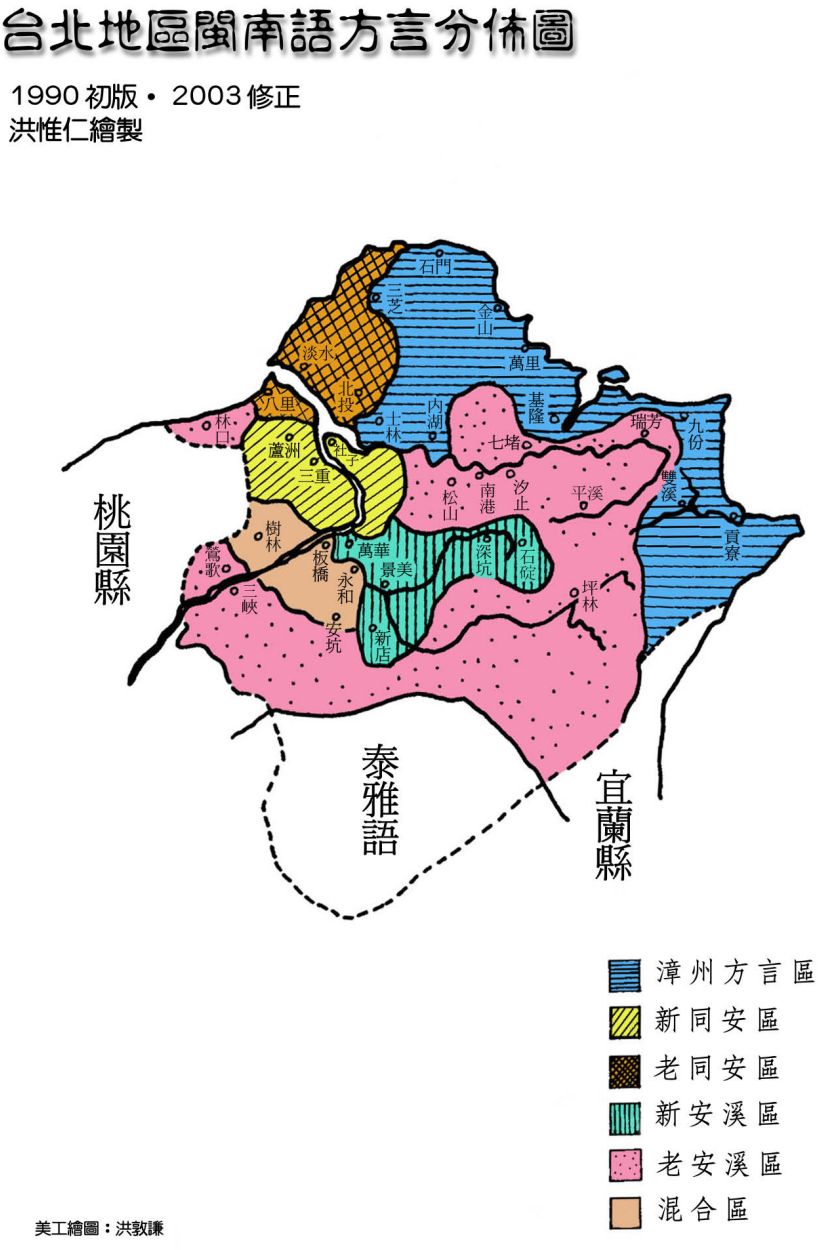
顧百里
1978『澎湖群島方言調査』，台湾大学修士論文

圖一




圖二
臺灣漢語方言分布圖
1985～1988老年層
山
地
區
山地、閩南、客家雜居區
海陸腔客語區
四縣腔客語區
偏泉腔閩南語區
偏漳腔閩南語區
漳泉混合區
方言島
1990 年洪惟仁繪

圖三


台北地區閩南語方言分佈圖
1990 初版・ 2003 修正
洪惟仁繪製
石門
三芝
淡水
北投
金山
萬里
內湖
士林
基隆
七堵
瑞芳
九份
雙溪
貢寮
八里
林口
蘆洲
社子
三重
松山
南港
汐止
平溪
樹林
鶯歌
板橋
萬華
美景
深坑
石碇
坪林
三峽
永和
安坑
新店
桃園縣
泰雅語
宜蘭縣
漳州方言區
新同安區
老同安區
新安溪區
老安溪區
混合區
美工繪圖：洪敦謙